

# 川柳マガジンクラブ東京句会 1月

平成21年1月11日(日) 駒込学園にて

参加26名 出席20名、投句6名

伊藤三十六、白勢朔太郎、甲野竜雄、五十嵐淳隆、井手ゆう子、左道 正、石崎流子、星野睦悟朗、水野絵扇、横山きのこ、藤原栄子、土江裕美、石田きみ、棚瀬くんじ、高田以呂波、加藤品子、菊地順風、村田倫也、植竹団扇、松橋帆波  
欠席投句6名  
関 玉枝、河野桃葉、丸山芳夫、渋川溪舟、秋山和子、山口千枝子、

## 自由吟 句評会

オレだけど詐欺に遭うなと電話来る 睦悟朗

・身近に感じた 祐美  
・非常に面白い いい句だと思いました きみ  
作者 オレオレ詐欺について、視点を変えて作ってみたかった

いい歳を重ねていると言われたい 三十六

・平易な表現で。願望であつてもなかなか句に出来ないことを表現している 朔太郎  
・気持ちよく判るが現実は大変なご努力をされているのでは 倫也

・こう言われたいですね きみ

作者 これはあくまでも願望。こう言われて見たいという願望です

多事多難缶コーヒーは温かい 帆波

・色々あるけど頑張ろうという気持ちが出ている 正  
・暮れの缶コーヒー。温さを感じる 流子  
・いろいろあったけれど、同時に珈琲を入れてくれる人がいない。寂しい人だなというイメージ。竜雄  
作者 四字熟語を使うことについてのご意見をお伺いしたかったのと、外国に人が日本で温かい缶コーヒーが出てくる自販機に、とても感動しているという話を聞いて作りました

十二支がひと回りして減る賀状 朔太郎

・面白い句だと思う 品子  
・年々実感している 以呂波  
・パソコンで年賀状を書くと年々へって行くのが判る

睦悟朗

・一回りは年配者は判るが、若い人はどうか。六回り位書けばどうだろう 淳隆

作者 最近特に感じるのは、賀状は今回で終わりにしましょうと辞退された方がおられる。お亡くなりになるだけでなく、そういった考えもあるのかと寂しく感じた

するされる介護で幸を分ち合い 以呂波

・実感でわかる 栄子

・実感だと思います。いい句だと思います きみ

作者 介護の暮しのなかで、そのことを苦にされていない方もおられる。そういう場面に遭遇して句にしました母の瞳へこの先の嘘言いそびれ きみ

・川柳では瞳をめとは読まないと思う。とても奥深い句

三十六

・嘘ではなくても心配させるようなことを言いそびれる、そんな気持ちがよく出ている きのこ

・全部信じてくれるからという見方も。よく判る句です

正

作者 幼い頃の実感。あることで言い訳したのだが、母の眼は優しいのだが厳しく、その先を言いそびれたという実感

後期ほど増すプライドを読み違え 品子

・私も後期なので自戒させられる句でした くんじ  
・紅葉マークを思い出した 睦悟朗

・後期高齢者制度のことを上手く皮肉っている 順風

作者 後期高齢者問題。年齢で分けられるということは多くの経験を重ねてこられた方々の気持ちを讀み切れていなかったのではと思いました

地球思い作る会社の派遣切り 順風

作者 百年に一度の大変な危機ということで車会社のことを書いてみました

街捨てる里に帰って地を起す 竜雄

作者 中年で都会を離れ田舎へ帰る人がいる。やはりコンクリートの中で暮らすより、人間最後は土や川や山のある風景に戻りたいのだという思いを詠んだ

寄せ鍋をキムチ一存朱に染め 団扇

作者 俳句の会に出した作品。俳句の人には好評でした

がど忘れをしてアドリブで切り抜ける 玉枝

・心当たりがある、アドリブが出るうちはいいが・

三十六

- ・全く同感です 朔太郎
- ・こうありたいなと思うがなかなかアドリブが出てこない いゆう子
- ・実感が湧く 祐美
- ・アドリブがなかなかでないので羨ましい 以呂波
- ・よくあることなので実感句として受け止めました 栄子

焼餅を膨らめている好きな人 絵扇

- ・情景がよく目に浮かぶ 淳隆
  - ・中七の部分がぎこちなく感じた 帆波
- 作者 やきもちと焼餅が膨らむことを掛けてみた

警察は独り者だと知っている 桃葉

- ・一人で暮らしている人は警察はよく調べていますね 竜雄
- ・どきりとさせられる句 順風
- ・色々と広がっている。警察官は信用できるのかなと考えると皮肉が利いている着眼点が素晴らしい 帆波

釣れた人だけが明るい帰り船 淳隆

- ・よく判る光景 三十六
  - ・連れなかつた人の様子が目に見えるようです 倫也
- 作者 世の中くらいニュースが多いので明るい句を思つて・・

背が伸びた蛇はそろそろ脱皮する きのこ

- ・背が伸びた蛇というフレーズが新鮮に感じた 帆波
  - ・そろそろが効いている 団扇
- 作者 安心して脱皮できる状態をイメージした。

白くなる術を忘れた冬の息 芳夫

- ・冬に人間を重ねた、冬を擬人化したとてもいい句だと思います 三十六
- ・温暖化で温かくなつて息も白くならないと取った上手く表現している 正
- ・温暖化の問題だと思ふ 品子
- ・綺麗な川柳だと思ふ 祐美
- ・温暖化が思い出されるが、警告を発しているように思える 流子

作者 温暖化のせいか、白い息を見なくなつた。それを句にしたいと思つていた。「白くなるコツを忘れ

た」と浮かんだが、術の方が良いかと思ひ・・

人間が好きで早死になど出来ぬ 溪舟

- ・本当になるほどなと思つた。川柳が好き人間が好きで長生きしたいと思ふ ゆう子
- ・たしかに人間ほど面白いものはない くんじ
- ・長生きすると人間が好きなのかなと思ふ 竜雄
- ・人間が好き川柳が好き そういう情景がよく出ている

作者 もっと川柳人との交遊を深めたいもの 順風

念仏を唱え始める乱気流 正

- ・気持ちがよく判る。乱気流は今の世界経済に乗せているのでは 以呂波
- 作者 少し推敲不足かと思ひました

あいまいに別れた人の年賀状 ゆう子

- ・私も思い出すことがあります くんじ
- ・気になっているのだけれど出しそびれて、出しそびれた人から賀状が来る。以前恋仲だった人とのことと見ると訳ありだと思ふ 倫也
- ・意味深で良い 絵扇

・曖昧なのだがそれがかえつて上手い 淳隆

・あいまいという表現から広がる部分がいい 帆波

作者 あいまいなことが書いてある手紙 団扇

作者 書かないでいると来るのでまた書くという、そういう関係の年賀状をイメージしました。

雨の音にたまの朝寝を破られる 裕美

作者 よく考えたら雨の音が大きいと眠れるのかな  
・・・と思ひました。

屠蘇祝う口をへの字に腕もくむ くんじ

作者 正月のテレビで麻生総理が出ていて、見ている自分も口が曲つて、という今年の出来事を詠みました。

お茶飲みに孫の土産を惜しく出し 和子

・かわいい孫が買って来たお土産。いつくしむ気持ちがよく出ている。きのこ

・実感です。同感します。 くんじ

身の丈の暮らしに慣れて恙無い 栄子

作者 平凡な暮らしていつも欲も得もなく暮らしている  
のでこの句を詠みました。

派遣村千代田の森に小舟出す 流子

- ・表現が上手だと思つた。 ゆう子
- ・今の問題。時代を捉えている きのこ
- ・上手に詠まれている 睦悟朗
- ・東京に住んでいると千代田と詠めない。そうかと気付かせてもらった。 団扇

作者 年末年始のテレビに取り上げられ、デモが起き、各自治体の対応が動き出したことを詠みました。  
千代田は国会、小船はデモを想定しました。

世の中がどう変わるうとマイペース 倫也

・平易な表現でいい。こうありたいもの 朔太郎

・平易な表現で当たり前のことを言っているようだが面白  
白い 淳隆  
作者 自分の性格からジタバタしても仕方ないのでなる  
ようになれという思いを詠みました。

### 課題吟 二人選

「今年起こりそうなこと」石崎流子選

「佳作」

ニワトリにマスクとうがいさせている 正

恐らくは今年も来るぞ大晦日 団扇

職安が霞ヶ関に出す支店 三十六

アラフォーの結婚ラッシュ巻き起こる 団扇

古本屋マルクス本も平積みにくんじ

デパートがリサイクル屋を始めます きのこ

ベランダを菜園にせよ区が決める きのこ

お花見の側に延々青テント 倫也

天皇にアドリヴが効くようになり 芳夫

激減の資産に給付金を足す 睦悟朗

「秀作」

不況脱出確かな技が光り出す 桃葉

変わらぬと思うな富士のシルエット 品子

親も子もハローワークの列にいる 玉枝

「特選」

八回目終の住処が大当り 絵扇

「今年起こりそうなこと」松橋帆波選

「佳作」

新しい農薬の名をまた覚え 正

ニワトリにマスクとうがいさせている 正

不況下の選挙を揺する消費税 朔太郎

平成にええじゃないかが駆け抜ける 品子

天地人歴史を飾る視聴率 朔太郎

綱を捨てモンゴルでやる実業家 順風

変わらぬと思うな富士のシルエット 品子

恐らくは今年も来るぞ大晦日 団扇

オレオレが餌食に狙う給付金 玉枝

デパートがリサイクル屋を始めます きのこ

「秀作」

ニューリーダー派遣村から担ぎ出す 流子

天皇にアドリヴが効くようになり 芳夫

皇居前広場にも来る青テント ゆう子

「特選」

田母神が無所属で立つ総選挙 三十六

お試し句会

折句「は・つ・ひ」伊藤三十六選

「佳作」

白昼に罪な人ねと膝枕 きのこ

鼻声につい絆されて膝枕 団扇

墓場までついに持ち越す秘密主義 帆波

母と娘の辛い半生の弾き語り 団扇

春風と付き合いたいが暇がない 帆波

廃屋に蔦伸び屋根も陽が射さず 倫也

春近い摘まんでは揉む皮下脂肪 淳隆

ハイテクで月まで届く飛行船 きのこ

春受験辛かった夜に陽が当る 淳隆

反省をついつい忘れ昼の酒 正

「秀作」

派遣切り冷たい企業乾涸びる 倫也

ハイハイと辛い箱根で光る足 睦悟朗

破綻後も強がっているヒルズ族 ゆう子

「特選」

初めての杖を頼りの一人旅 以呂波

軸 花嫁を連れ戻したい一人っ子 三十六

え方。

どちらも一理あるが、詠むテーマ、表現しようとする事柄によつては、「主観」「客観」と分けることはないのではないか。という捉え方。

これについて、現代に至る川柳の流れを遡りながら、川柳が取り込んできた表現手法の観点から検証してみたいと考えております。

まとめ 松橋帆波

ご質問コーナーでは、

「前句附」の選について淳隆さんからご質問がございました。

川柳マガジンで募集されている「前句附」ですが、入選句を見ると前句をつなげなくても、一句で独立している作品と、前句をつなげないと句の世界が収まらない作品、が混在しています。

これはどちらが正しいのだろう。というご意見でした。

これについては、少しいろいろと調べて、近いうちに「お試し句会」で前句附を実際にやってみよう思います。

それから、川柳は主観なのか、客観なのかというご質問が倫也さんからございました。

例えば、時事問題を扱う時、自分が知っている事柄と、世間で認識されている事柄が違っている場合、自分が知っていること（経験していること）は客観的事実なのだが、世間の認識からすれば主観的事実と見なされるのではないか。つまり、何をもって主観といい、何をもって客観というのか。という問題です。

句を詠んだのは自分なのだから「主観」だ、という捉えかたと、

句は伝わらなければならぬ、意味が共有されなければならぬ、だから「客観」という捉